

令和2年度 野生鳥獣との共存に向けた生息環境等整備調査（屋久島地域）

報告書要約版

(1) 生息密度調査（糞粒法）

【調査内容】

・5地点の調査結果からヤクシカの生息密度を推定し、地域間比較等を行った。さらに、過去にも調査されている地域に関しては、推定生息密度の増減と増加率を求めた。

・一湊林道（北）、愛子東（北東）、尾之間下（南）、大川林道奥（中央）、宮之浦林道（中央）

【結果】

・（増加）一湊林道、尾之間下、宮之浦林道、（減少）愛子東、大川林道奥

・宮之浦林道のように捕獲が続いている地域でも増加傾向が見られ、隣接地域からのヤクシカの流入や捕獲を免れた個体の繁殖の可能性がある。

(2) ヤクシカの移動状況調査（GPSテレメトリー法）

【調査内容】

・10月13日、中央部地域で1頭（雌、亜成獣）に衛星タイプのGPS首輪を装着し、6時間間隔で位置情報を取得。11月25日までのデータを基に移動経路追跡調査を実施。

【結果】

・中央部地域の行動圏は、黒味岳の北東～南側斜面にすることが多く、小花之江河から黒味岳山麓までの東西に約600m、南北に約1.5kmと、比較的狭い範囲を往来していた。

・踏査ではシカの痕跡が他地域の調査に比べて少なく、何を主に採餌しているのか不明。

・11月27日からバッテリーが急速に低下し、12月23日にドロップオフ操作を実行したが、首輪の回収には至っておらず、今後は拾得した登山者からの情報を待っている。

(3) 植生の保護・再生手法の検討

【調査内容】

①植生保護柵の保守点検

・既存植生保護柵28箇所（植生保護柵20箇所・萌芽枝保護柵8箇所）及び本年度追加の既存植生保護柵4箇所（植生保護柵のみ4箇所）の維持管理。

②マテバシイ萌芽枝の生育状況

・柵内外のマテバシイ母樹、萌芽枝、及びカシノナガキクイムシの穿入痕調査を実施。

③植生保護柵内外の植生調査

・柵内外それぞれ2m×2mの小プロットを4地点設定し、低木層（1m以下）と草本層について植物社会学的調査を実施。

④植生被害ライン調査

・一湊林道（北）、愛子東（北東）、尾之間下（南）、大川林道奥（中央）、宮之浦林道（中央）

【結果】

- ①台風による倒木等で柵の破損が確認され、愛子 800m では大規模な補修が必要になった。
- ②カシノナガキクイムシの穿孔被害は減少し、萌芽枝の芽吹きは増加した。台風等での母樹の被害も少なく、萌芽枝の生産にエネルギーを使用したと考えられる。食害を受ける柵外では、この2年で萌芽枝の総数が柵内を上回り、母樹に余力があることを示している。
- ③種数が減少した地域は中型の葉を広げるシダ類が優占しており、競争で不利となった植物の生育を妨げている可能性がある。今後は、間引き等の適正な管理が必要と考えられる。
- ④全ての調査箇所では出現本数は増加していたが、種数の増加はあまり見られなかった。

(4) 森林生態系の管理目標に関する現状把握・評価

【管理目標】

- ①屋久島の多雨環境を反映したシダ植物の林床被度の回復②屋久島世界自然遺産の顕著な普遍的価値である植生垂直分布の多様性の回復③ヤクシカの嗜好性植物種の更新④絶滅のおそれのある固有植物種等の保全

【現状評価】

- ①多くの地点で柵内外の被度が目標に至っていない種が多く見られた。
- ②全ての標高帯で種数が増加し、引き続き概ね目標が達成されている事が確認できた。
- ③低標高域では元々確認種数が少ない上、調査開始当初よりさらに減少傾向にあった。標高 400m 以上の調査地は維持増加傾向にあり、種数の点からは目標となる状況にあるが、消失種について今後の回復を見ていく必要がある。嗜好性植物の点からは、標高 400m 以下の低標高地域が対策優先地域と考えられる。
- ④種数や個体数が減少した地点では、絶滅のおそれのある固有植物種等の生育状況の悪化が考えられ、今後注視していく必要がある。

(5) 高層湿原におけるヤクシカの生態調査

【調査内容】

- ①自動撮影カメラによる分析
・夏季から冬季にかけて自動撮影カメラ 10 台を 20 週間以上設置し、画像データを分析。
- ②糞塊調査
・冠水状況と植生群落状況から区分し、花之江河 33 箇所、小花之江河 22 箇所を実施。

【結果】

- ①両湿原で GPS 首輪取付の誘引状況や、GPS 首輪を装着した個体が撮影された。昨年度は記録されなかったノイヌ、タヌキが撮影され、生態系への影響が懸念される。
- ②8 月、11 月とも花之江河の方が小花之江河よりも糞塊数が多く、11 月は昨年に比べて両湿原とも減少した。経済対策で登山客の往来が増加したことが一因と考えられる。